

5.4 3元配置分散分析 pp.93-97

5.4.1 実験デザインとデータの並べ方

■ 3元配置分散分析では、以下4つの実験デザインがある。対応なしの要因(ABC)は縦に、対応あり(PQR)の要因は横に並べる原則は同じ。

	指導法 (要因 A)	学習動機 (要因 B)	性別 (要因 C)	スピーキング (変量)
1 ⋮ 20	指導法 1 (水準 A1)	上 (水準 B1)	男 (水準 C1) 女 (水準 C2)	
		下 (水準 B2)	男 (水準 C1) 女 (水準 C2)	
21 ⋮ 40	指導法 2 (水準 A2)	上 (水準 B1)	男 (水準 C1) 女 (水準 C2)	
		下 (水準 B2)	男 (水準 C1) 女 (水準 C2)	
41 ⋮ 60	指導法 3 (水準 A3)	上 (水準 B1)	男 (水準 C1) 女 (水準 C2)	
		下 (水準 B2)	男 (水準 C1) 女 (水準 C2)	

図 5.41 デザイン ABC：
対応なし×対応なし×対応なし

被験者	指導法 (要因 A)	学習動機 (要因 B)	学期末テスト (要因 P)		
			1学期 (水準 P1)	2学期 (水準 P2)	3学期 (水準 P3)
1 ⋮ 20	指導法 1 (水準 A1)	上 (水準 B1)			
		下 (水準 B2)			
21 ⋮ 40	指導法 2 (水準 A2)	上 (水準 B1)			
		下 (水準 B2)			
41 ⋮ 60	指導法 3 (水準 A3)	上 (水準 B1)			
		下 (水準 B2)			

図 5.42 デザイン ABP：
対応なし×対応なし×対応あり

被験者	指導法 (要因 A)	学期末テスト (要因 P)		
		1学期 (水準 P1)	2学期 (水準 P2)	3学期 (水準 P3)
		課題 (要因 Q)		
		課題 1 (水準 Q1)	課題 2 (水準 Q2)	課題 1 (水準 Q1)
1 ⋮ 10	指導法 1 (水準 A1)			
11 ⋮ 20	指導法 2 (水準 A2)			
21 ⋮ 30	指導法 3 (水準 A3)			

図 5.43 デザイン APQ：
対応なし×対応あり×対応あり

	要因 P (年数)					
	1年目 (水準 P1)			2年目 (水準 P2)		
	要因 Q (学期末テスト)					
	1学期 (水準 Q1)	2学期 (水準 Q2)	3学期 (水準 Q3)	1学期 (水準 Q1)	2学期 (水準 Q2)	3学期 (水準 Q3)
	要因 R (課題)					
	課題 1 (水準 R1)	課題 2 (水準 R2)	課題 1 (水準 R1)	課題 2 (水準 R2)	課題 1 (水準 R1)	課題 2 (水準 R2)
1						
2						
3						
4						
⋮ 15						

図 5.44 デザイン PQR：
対応あり×対応あり×対応あり

5.4.2 3元配置分散分析に関わる効果

① 2次の交互作用 (three-way interaction; a second order interaction)

・3要因の交互作用のことで、3つの要因のいずれかに交互作用がある場合を指す。

(例) 図 5.41 のデザインで要因 C(性別)を男女別にした図で考える。

・左の男子のグラフでは女子と異なり交差している箇所があり、ここで2次の交互作用が認められる。
・つまり、ある要因(性別)を、水準別(男子・女子)に分けてみたとき、他の要因の水準パターンが異なるときに2次の交互作用が起こる。

→ 2次の交互作用があれば、単純交互作用の検定に進む。

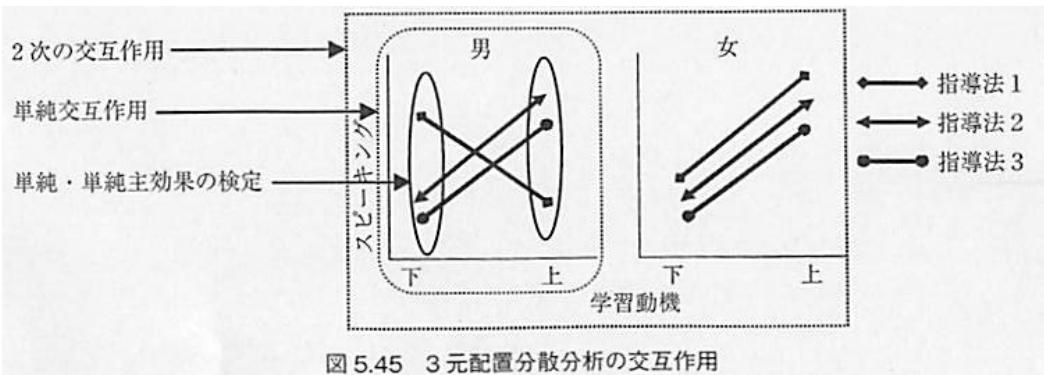


図 5.45 3元配置分散分析の交互作用

② 単純交互作用 (simple interaction effect)

- ある要因 (性別) の特定の水準 (男子学生) における交互作用のこと。
- 図 5.45 の男子学生において、指導法 (要因 A) と学習動機 (要因 B) が交差している。
→ 要因 A × 要因 B の交互作用が認められる。
- 単純交互作用があれば、単純・単純主効果を見る

③ 単純・単純主効果 (simple-simple main effect)

- ある要因 (性別) と別の要因の特定の水準 (学習動機上位) における 3 つ目の要因 (指導法) の主効果のこと。
- 図 5.45 では、男子学生で、学習動機が高い場合に、指導法の効果の違いがあるかを調べること。

5.4.3 3元配置分散分析の流れ

以下のように高次の交互作用から検討し、有意であればその下位検定や多重比較を行なっていく。

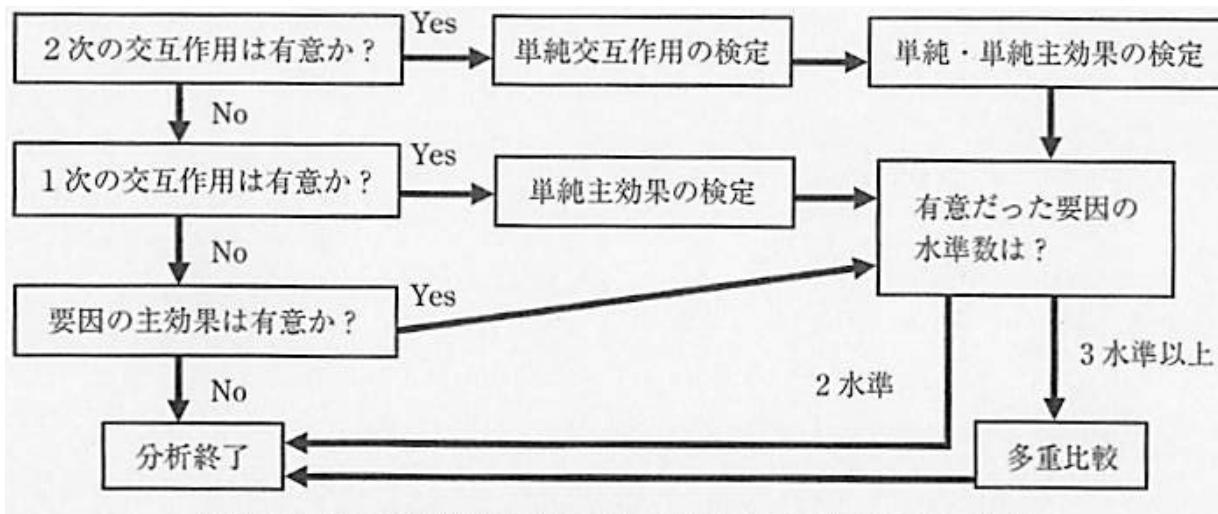


図 5.46 3元配置分散分析の流れ (竹原 [2010] をもとに作成)

- 二次の交互作用が有意であれば、下位検定が非常に複雑になる (詳細はテキスト pp95-96 参照)。
→ SPSS の対比 (contrast) 機能を使って、比較する水準をあらかじめ決めて行う事前比較方法で対処できる。